

持続可能な地域づくりに向けた官民協働による 環境学習推進プロジェクト



SOLOMON

第1期事業「New3R(リデュース、リユース、リサイクル+リターン)の理念を踏まえた官民協働による家庭ごみの分別収集システム構築プロジェクト」が終了

ソロモン諸島では、デング熱やマラリアなどが頻繁に流行するなど子供たちを中心に多くの市民の保健・衛生面での環境改善が急務の課題となっています。この要因として、家庭ごみの収集処理や下水処理などの社会的なインフラ整備の遅れや防路や河川へのごみのポイ捨てなど市民の社会規範の欠如などが指摘されています。

LEAFは2014年から3年間ソロモン諸島の首都ホニアラ市において、「New3R(リデュース、リユース、リサイクル+リターン)の理念を踏まえた官民協働による家庭ごみの分別収集システム構築プロジェクト」を実施しました。

プロジェクトでは、市役所、民間企業、大学、教会、女性団体、ユース団体、市民団体など異なるステークホルダー間の話し合いの場を創る作業を行い、ホニアラ市役所主導で2015年4月に「ホニアラ市官民協働会議」を設立し、ごみ問題を多角的に検討できるしくみを作りました。また、市内家庭ごみ収集の基礎データを収集・分析し、家庭でのごみ分別啓発活動も行いました。



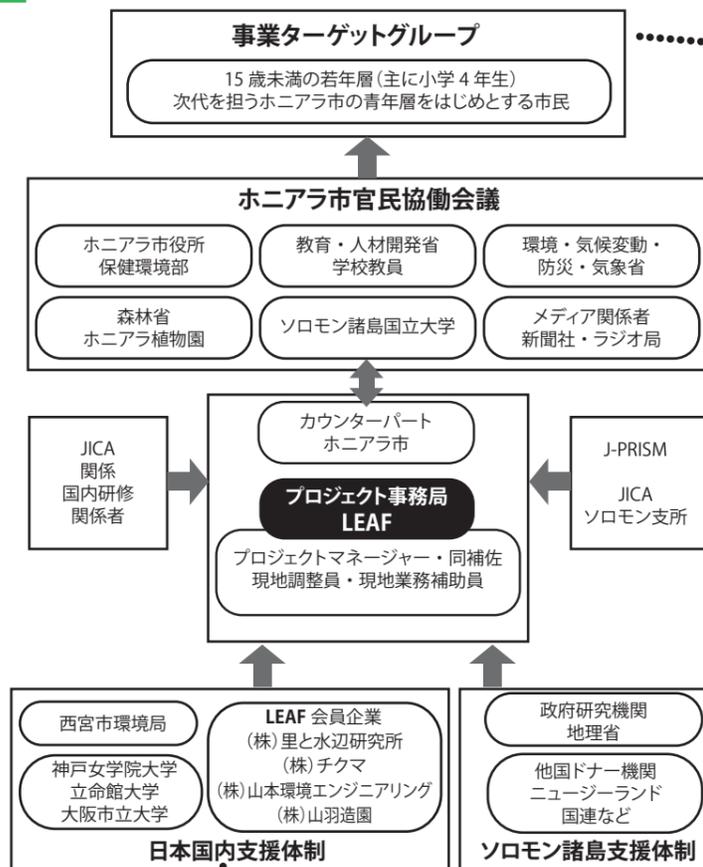
ナハ地域でのごみ学習、啓発活動(2016年)

第2期事業として「環境学習推進プロジェクト」を提案

教育・人材開発省などにおいては保健衛生に関する副教材を作成するなどのアプローチもなされていましたが、ごみ処理や保健衛生の発生要因の一因となる自然環境とのつながりについては、教育の中で取り扱われていないことがわかりました。また、首都ホニアラ市(ガダルカナル島)に職を求めてやってくる他島からの移住者は、ホニアラ市への愛着心も薄く、まちを大切にするという意識が弱いという課題も明らかになりました。

ホニアラ市の持続可能な発展を考えた時に、長期的な視点に立った市民意識向上に向けた教育施策が必要ではないかと考え、第2期事業として『持続可能な地域づくりに向けた官民協働による環境学習推進プロジェクト』を提案し、採択されました。

現地及び国内での事業実施・支援体制(関係図)



プロジェクト目標

市民・事業者・行政により設立した「ホニアラ市官民協働会議」を核として、次代を担う子供たちへの環境教育・学習活動を体系的、継続的に実施するための体制を整備することにより、ホニアラ市の持続可能な地域づくりを推進します。

実施期間 2017年8月～2022年5月

現在、ホニアラ市が抱えている廃棄物処理や保健衛生の充実などの喫緊の課題に対するとともに、長期的・予防的な視点での課題解決に向けた市民意識の向上を図る必要があり、若年層に対する地域への愛着を醸成する教育が重要と考え、若年層をターゲットとしました。

また、持続可能な地域づくりホニアラ宣言や環境学習プランの策定を通じて将来世代を含むホニアラ市民全員の生活改善にも貢献できるものと考えています。

15歳以下の若年層は約2万人、ホニアラ市の住民は約6万人。

当協会が実施した「New3R(リデュース、リユース、リサイクル+リターン)の理念を踏まえた官民協働による家庭ごみの分別収集システム構築プロジェクト」において、異なるステークホルダー間の話し合いの場を提供する目的で、2015年4月、ホニアラ市役所主導で設立されました。

第2期事業においても構成メンバーは変わるが引き続きこの会議を核としてプロジェクトを進めます。

専門家研修内容

- ・持続可能な開発のための教育(ESD)の考え方と教員養成…大阪市立大学
- ・植生調査…(株)里と水辺研究所
- ・地理学から地域環境の特性や自然災害の危険性を理解…立命館大学
- ・自然生態系及び自然教育、昆虫類の調査分類…神戸女学院大学
- ・水生生物調査による河川の汚染状態診断手法…(株)山本環境エンジニアリング
- ・樹木剪定枝などのコンポスト化の手法…(株)山羽造園
- ・布地端材リユース活動「バトンバッグプロジェクト」…(株)チクマ
- ・環境学習都市の地域戦略(エココミュニティ会議)について…西宮市
- ・市民参加による自然調査手法、貝類館事業運営…LEAF
- ・非営利活動法人のマネジメント…LEAF
- ・ホニアラ市官民協働会議運営…LEAF

地域理解を促進するため、日本の専門家によるホニアラ市ならびにソロモン諸島の行政職員及び教員、地域指導者(区長など)を対象とした研修を実施し、多面的な環境課題について日本の経験を移転します。

また、専門家については、研修の他に自然環境や地理情報などに関する現地調査を行ってもらい、環境学習施設の展示内容や環境学習副教材の作成に活用する情報を収集整理します。

事業概要



第2期プロジェクト 協働会議 (2017年)

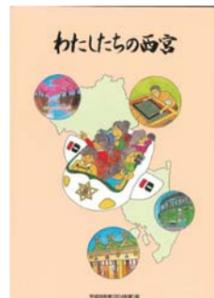
プロジェクト開始にあたり、カウンターパート及び関係機関との協議を行い、ホニアラ市の市政運営の中に環境学習プランや「持続可能な地域づくりホニアラ宣言」が位置付けられる方向性について合意を得ることができました。

参加団体：市役所 / 民間企業 / 大学 / 教会 / 女性団体 / ユース団体 / 市民団体 etc.

持続可能な地域づくりに向けた環境学習事業を推進する上で、地域に関する各種情報(町の歴史や廃棄物処理、保健衛生、防災、自然環境等)が収集され、各世代の市民が理解できるように整理公開されていなければなりません。

本プロジェクトでは、こうした情報の収集に加え、児童(小学4年生)を対象とした地域理解学習や幅広い年齢層を対象に自然学習などを継続的に実施することを通じて、ホニアラ市に愛着を持つ市民の育成を目指します。

ソロモン諸島では、教育・人材開発省が学校で使用するあらゆる教材に関する承認機関となっているため、ホニアラ市で活用するこれら副教材についても国家カリキュラム委員会での審議を受ける必要があります。2017年度には、教育・人材開発省のカリキュラム部職員に本プロジェクトの説明を行い、方向性についての合意を得ることができました。



兵庫県西宮市の小学校で使われている地域学習のための副教材。ホニアラ市でも同様の地域教材を作成する予定。

(1) 環境学習活動の体系的な推進を通じた持続可能な地域づくりホニアラ宣言の策定

- ①-1 ホニアラ市持続可能な地域づくりに向けた環境学習プランの策定と進行管理
- ①-2 環境学習活動の体系的な推進を通じた持続可能な地域づくりホニアラ宣言を制定
- ①-3 環境学習都市宣言記念フォーラムの実施

(2) 廃棄物・自然環境を学ぶ環境学習支援拠点施設の整備

- ②-1 廃棄物学習サポートセンター、コンポスト学習サポートセンター、自然環境学習サポートセンターの設置
- ②-2 各サポートセンターでの体験型学習プログラム開発

(3) 日本の経験伝達を通じた人材育成プログラムの実施

- ③-1 地域理解促進するための市職員、教員、住民(区長など)を対象とした現地研修の実施(8回)
- ③-2 中・高・大学生、教員、メディア関係者、事務局職員を対象とした環境学習訪日研修の実施(6名、3回)

植物、地理学、教育、自然生態系及び自然教育、市民参加による自然調査手法、環境学習都市の地域戦略、水生生物調査による河川の汚染状態診断手法、樹木剪定コンポスト化の手法、布地端材リユースプロジェクト、非営利活動法人のマネジメントなど、様々な分野から派遣します。

(4) 教育カリキュラムと連動した各世代の子ども達を対象とした地域学習教材等の作成

- ④-1 地域学習に係る情報(町の歴史や廃棄物処理、保健衛生、防災、自然環境など)の収集整理
- ④-2 地域学習教材、自然環境学習教材作成に向けた編集委員会を設置
- ④-3 地域学習教材、自然環境学習教材作成に関する教員向け研修の実施
- ④-4 地域学習教材「わたしたちのホニアラ」と「ホニアラの動植物の簡易図鑑」を作成し、学校等に配布
- ④-5 モデル授業の実施と振り返り

(5) 官民学協働による持続可能な地域づくりを推進するための非営利活動法人の設立

- ⑤-1 現地職員を雇用し、事務局員として本プロジェクトを推進
- ⑤-2 パートナーシップ団体(非営利活動法人)の自立運営に向けた財源確保など条件整備
- ⑤-3 プロジェクト目的を踏襲した官・民・学のパートナーシップによる非営利活動法人の設立

2017年11月、環境学習施設の設置を予定しているフィールド(最終処分場、ソロモン諸島国立大学、国立植物園)を視察し、関係者にプロジェクトの説明を行い、活動内容に合意を得ました。



廃棄物学習サポートセンター

設置場所：ラナディダンプサイト、管理棟
学習内容：廃棄物の現状を理解するとともに、第1期プロジェクトで設置した資源回収車、ペットボトル圧縮梱包機などを活用し、資源リサイクル、リターンの考え方を普及する
付帯設備：見学者向けの解説ボードや衛生埋め立ての説明を行うための模型、資源分別用簡易建屋の建設



コンポスト学習サポートセンター

設置場所：ソロモン諸島国立大学内コンポスト学習フィールド
学習内容：家庭、コミュニティ等から排出される有機系ごみを土壌還元するための方法や地域単位でのコンポスト施設の設置方法など、有機系廃棄物の自然還元のしくみや方法を学習する。また、これらの堆肥を農業に活用する方法や事例を紹介する
付帯設備：堆肥化を促進するための建屋及び物品保管庫、堆肥化作業用具(コンポストなど)。見学者向けの解説ボード

2017年8月、植物、地理学、教育の専門家派遣を行いました。



起伏の多いホニアラ市を望む

教員向け研修を実施
31名の参加があった



専門家派遣時に職員にプロジェクトの説明を行い、方向性について合意を得ることができました。また、カリキュラムやホニアラ市内の小・中学校を訪問し、授業の様子を見学した他、地域学習・自然学習副教材の作成を念頭に、現地の自然環境を視察しました。



自然環境学習サポートセンター

設置場所：国立ソロモン植物園
学習内容：ホニアラ市に生息する動植物に関する情報を収集整理。動植物の標本や水槽飼育などを活用し、子どもたちの自然教育を推進するための学習プログラムを開発します。市内河川の水質状況や生息生物等を継続調査し結果をパネルで紹介する。
*ソロモン諸島国立大学教育学部化学教室の学生の活動として調査を実施する
付帯設備：昆虫標本箱、水槽、学習用パネルなどの展示コーナーの設置、見学者向けの解説ボード

2017年度、環境学習への理解を深めるため、現地職員の訪日研修を実施しました。



現地職員を2名雇用しました。プロジェクト終了時に現地法人を設立する予定としています。



↑2018年1月、現地職員とスケジュールを確認する

教員向けワークショップ、現地の教育関係者との意見交換

大阪市立大学大学院文学研究科教授

NPO法人こども環境活動支援協会（LEAF）代表理事
添田 晴雄

ソロモン諸島におけるJICA事業（持続可能な地域づくりに向けた官民協働による環境学習推進プロジェクト）を始めるにあたり、2017年8月29日～9月3日、代表理事として首都のホニアラ市を訪問しました。JICA支所、日本国大使館、ホニアラ市庁舎への表敬訪問のほか、さまざまな活動を行いました。私の専門とする教育関係の活動としては、同国教育省カリキュラムオフィス国家健康促進校コーディネーターのフィオナ氏への表敬訪問、同局で開催されていたカリキュラム会議の委員とのESDに関する意見交換、ホニアラ市教員研修での講演、現地校2校の見学などを行いました。

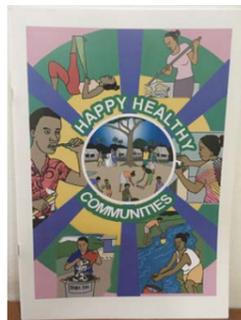
環境学習推進に向けて

今回の環境学習推進プロジェクトでは、教師も重要なターゲットグループでした。そこで、ホニアラ市の教師を対象に、本プロジェクトの趣旨、および、ESD（持続可能な開発のための教育）についての教員研修を行いました。出席者は約25名でした。

講演では、①ESDの考え方、②日本の教育改革の動向（新しい学習指導要領の趣旨）、③エコカードのコンセプトの3つを柱にして説明しました。

①では、環境（Environment）の問題を単独で解決するのではなく、経済（Economy）、社会的公正（Equity）とともに3つEを解決していくことが大切で、そのためには、4つめのEである教育（Education）が鍵を握っていることを説明しました。

②では、教室の中で学んだことを社会の中で活用することが日本の教育改革の中で重視されていることを説明しました。ソロモン諸島で使われている教科書を見ると、理科でも、算数でも、国語でもそうなのですが、教科の内容が身近な生活の事例と結びつけて説明されているページが少なくありません。日本の学校がこれから目指している方向性をソロモンの子どもたちが先取りしているとも言えるとお話しました。



保護者向けの啓発冊子

保険衛生について、子ども達が学校でどのような事を学んでいるのかが書かれている、



③については、西宮市の小学生全員に学校を通してエコカードが配布されており、子どもが環境や持続可能な社会に向けた活動をすると、それを大人が評価してカードにスタンプを押すというシステムが20年以上続いていること、スタンプが10個以上たまるとアースレンジャーとして認定されることになっているが、現在20%を越える小学生がその認定を受けていることを紹介しました。

エコカードを西宮市で始める契機となったのは、学校で身につけた価値観と、地域・家庭の大人が持っている価値観との差異に子どもが戸惑い悩むことになるのではという問題意識からでした。このシステムでは、子どもが生活している身近な場面で、大人にスタンプを押してもらいます。そこに会話が生まれます。大人は子どもを褒めます。環境にやさしくするためには何が必要かを話します。自分たちががんばるよ、といったことを子どもに伝えることもあります。エコカードは、学校の価値観と地域・家庭の価値観を結びつけるためのコミュニケーション・ツールなのです。単にスタンプがたまるのがうれしくて環境などにいいことをするようになる、といった表面的な考え方ではないことを先生方に説明しました。

エコカードのコンセプトを時間をかけて説明したのには理由がありました。実は、研修会の次の週に、健康・衛生・環境をテーマにした新しい教科書が導入されることになっていました。研修会の前日に訪問した教育省カリキュラム局でもこれが話題となりました。内容はよくできており、おそらく、子どもたちはこのテーマの価値を深く学び、自分たちでできることを始めるようになることと確信しました。しかし、懸念されるのは、地域や家庭の大人たちが、まだ、新しい価値観を理解していないこ

とです。そうすると、子どもたちが学校で学んだ価値観と、地域・家庭の大人たちの価値観との差異が生じ、どちらの価値に従えばいいか、子どもたちは悩んでしまいます。エコカードを始めた時の状況と似ています。そこで、研修の後半では、この問題を取り上げて、ワークショップを行いました。

ワークショップ

全体を9つのグループに分け、各グループで話し合ってもらいました。新しく導入される教科書を使って子どもたちが学んでいく価値観と、地域や家庭の大人たちが持っている価値観との間にどのような差異があるのか、そして、このようなギャップを埋めていくためには、学校の教師として何ができるか、何をすべきか、ということを考えていただきました。また、各グループで考えたことを模造紙にまとめてもらい、その模造紙を使ってプレゼンテーションをしてもらいました。



グループワーク



プレゼンテーション

先生方の発表の中には次のようなものがありました。ゴミを減量させる意識を醸成させるために、子どもが保護者を学校に連れてきて、学校でいっしょに学校周辺のゴミ拾いをし、ご褒美ランチをいっしょに食べる。健康・衛生・環境の教科書のうち学校で習ったところを家庭で保護者の前で音読することを宿題にし、保護者が音読記録カードにサインし、そのサインの数で成績をつける。学校だよりを発行し、学校で子どもたちが学んでいることを保護者に伝える。環境や栄養についての歌をつくり、家庭で歌う。教師が家庭を訪問し、子どもが学校で学んだことを保護者も実践しているか評価したり、子どもにカメラを持たせて保護者の活動を記録させたりし、それらを子どもの成績に反映させる、などです。中には実効性が疑われるものもありましたが、日本の学校

でも実践されている方法もありました。ワークショップに参加した先生方にとっては、今まで想像もしていなかったことを急に考えることになりました。大切なのは、どのようなことを結論として考えたかではなく、講演とワークショップを通して、子どもが学校で学ぶ価値観と地域・家庭での大人の価値観をつないでいくことが重要であることに教師が気づいたこと、そして、教師が具体的に何をすべきかを考えようとしたことです。ホニアラ市の学校で子どもたちが学んだことが、今後、地域・家庭の大人たちにもどんどん共有されていくことを願っています。

学校訪問

教員研修とは別の日に2校の私立学校の訪問をしました。バーンズ・クリーク・アドヴェンティスト学校は、幼稚園から6年生まで、5歳～15歳、約500名の生徒がいます。放課後に児童が楽しそうに掃除をしていました。全校児童が一律に掃除をするのではなく、掃除の意識が高い先生が担任をしているクラスが掃除をするのだそうです。また、エコ・スクールにも認定されているセントニコラス・クリスチャン学校は、1学年2クラス、全6学年で7～12歳の生徒がいます。教室の中に、「REDUCE, REUSE, RECYCLE」「BE ENVIRONMENTALLY FRIENDLY」といった掲示がありました。また、校庭の隅には、生徒たちが集めたペットボトルがまとめて置いてあり、今後、生徒が分別できるしくみを作りたいと考えているそうです。



バーンズ・クリーク・アドヴェンティスト学校



セントニコラス・クリスチャン学校

専門家派遣 植生調査、意見交換会などについて



大きく樹冠を広げているアメリカネムノキ

1. はじめに

2017年11月23日から11月30日までの日程で、ソロモン諸島ホニアラ市の植生調査および意見交換会を実施してきました。現地調査は11月25日から27日にかけて実施しました。また、11月28日に開催された意見交換会では、これらの結果について発表を行い、参加者の皆様からいくつかご意見をいただきました。これらの状況についてご報告します。

2. ホニアラ市の植生の概要

(1) ホニアラ市内

はじめてホニアラ市内に入った時に感じたのは、緑が多いことです。市街地とその周辺の集落には、熱帯らしく、ブルメリア、オオゴチョウなどの花木や、バナナ、マンゴー、ココヤシ、パパイアなどの果樹がたくさん植えられています。また、メインストリートでは、ホウオウボク (Christmas Tree)、アメリカネムノキ (Rain Tree) などが樹冠を大きく広げ、暑さを避けるため、これらの木陰にたくさんの人が集まっていたことが印象的でした。沿道では、野菜、薯類、果物のほか、薪などが販売されている光景も見られました。後日、植物園長に伺ったところ、1960年代に大木を植えるプロジェクトがあり、植物園で苗を育てて、適切な間隔となるよう計画して植えてこられたそうです。1990年代頃まで、苗を配布して植栽されてきましたが、その後は植栽されることはなく、最近では、伐られることもあるそうです。また、沿道で販売されていた薪については、市外 (ガダルカナル島内) で伐採されたものとのことでした。

株式会社 里と水辺研究所
NPO法人 ども環境活動支援協会 (LEAF) 理事
田村 和也

(2) ホニアラ市周辺の丘陵地

周辺の丘陵地には、草原が広がっており、森林はあまり見られません。植物園長に伺ったところ、1930~1940年代頃は熱帯雨林でしたが、その後、焼畑などにより草原が広がったとのこと。薪などの燃料の採取、焼畑などの過剰利用により草原化したものと考えられます。現地調査の際にも、すぐ近くで野焼きが行われている状況を目にすることができました。急傾斜地などの一部では土壌の流れた跡なども見られたことから、大雨の際に土砂災害などにつながらないのか、気になるようです。



丘陵地の景観

(3) ホニアラ市西側の海岸

ホニアラ市西側には、自然海岸が続いています。海に近い場所では、グンバイヒルガオ、ハマナタマメの仲間といった海浜植物が生育し、内陸側には、クサトベラ、アダン、ゴバンノアシなどから構成される低木林が帯状に分布しています。このように、人の影響を強く受けていない場所では、波打ち際から背後の樹林へと連続的に変化する自然海浜の構造を観察することができました。また、これらの多くは、種子を海流によって運ばせることにより、日本の南西諸島も含めて太平洋の沿岸域に広く分布している植物です。自然海岸の生態系のモデルとしてだけでなく、海流を通じて太平洋の海岸に広域的に分布する植物を用いて、海岸の環境保全や世界とのつながりなどを意識する環境学習の展開などができると感じました。



自然海岸の植生の分布状況



海岸に打ち上げられたゴバンノアシの果実

(4) ホニアラ市東側のアブラヤシプランテーション

ホニアラ国際空港より東側の平地には、整然と植えられたアブラヤシ (Oil Palm) のプランテーションが見渡す限り広がっています。生物多様性の高い熱帯雨林が失われ、単一種の優占するプランテーションが広大な面積を占めるようになることで、生物多様性の低下や生態系への影響が気になるところです。

また、アブラヤシの林床にクズが繁茂していたことも気になりました。これは、植栽されたものとのことです。日本やアメリカでもクズが繁茂して困っているところもあるので、予想を超えて広がってしまわないか、心配になりました。



整然と植栽されたアブラヤシ

(5) ホニアラ市の植物園

ホニアラ市内にある植物園の周辺には、まとまった森林が残されています。林内には幹の太い立派な樹木がみられ、根元に板根と呼ばれる板状の構造が発達している木も見られます。これらの特徴から、自然性の高い森林

であることが窺われます。この場所は1960年代に植物園となり、それ以来、原生林として位置づけられていて保護されてきたとのこと。これからもホニアラ周辺の生物多様性の核として、また、森林再生を目指す場合のモデル林として、大切にしていきたいと思います。



植物園内の森林の様子↑

発達した板根→



3. 意見交換会

意見交換会では、ホニアラ市およびその周辺で確認したおもな植生を紹介し、これらの植生と人の影響との関係についてお話ししました。また、日本の状況として、六甲山の植生の歴史を取り上げ、過剰利用により森林が失われ、土砂災害などが頻発したこと、それらを防ぐため、人々が積極的に緑化してきたこと、その後、120年程度を経過して、森林が回復してきたことを紹介しました。その上で、今度は樹木が大きくなりすぎて、台風により人の生活圏で倒木が発生するなど、防災上の懸念が生じていることなどを紹介しました。

4. おわりに

ホニアラ周辺において様々な植生を確認できましたが、日本と同様、人の影響の度合いにより植生に違いが生じていることがわかりました。焼畑や燃料採取により草原化したホニアラ市周辺の丘陵地の草原は、かつて、過剰利用により森林が失われた日本の六甲山の姿とも重なります。一方、パーム油の需要の拡大が続けば、ホニアラ東部に見られるプランテーションも拡大していく可能性があります。過去の経緯、今回の派遣で確認した現状、そしてホニアラの人々の生活がこれからどのように変化していくのかも踏まえて、持続可能な発展のためには、どのようなことを伝えていけばよいのか、考えていきたいと思っています。

人材育成 2週間の国内研修を通して

NPO法人子ども環境活動支援協会（LEAF） JICA草の根技術協力事業 現地調整員
 テスニー・ジェーン・バイシ

JICA 草の根技術協力事業「持続可能な地域づくりに向けた官民協働による環境学習推進プロジェクト」の現地調整員として、10月14日から31日まで、日本での研修を受けることができました。研修ではプロジェクトについてより深く理解することができ、私に求められている仕事や何をしなければならないかということを理解する上で非常に重要なものとなりました。2週間という短い期間でしたが、実際の業務を開始する前に、このような研修期間を設けていただいたことは非常に嬉しく、幸運に思います。研修期間中は、毎日スケジュールが決まっており、様々な活動に参加したり、施設を訪問したりしました。どの日も学びが多いものでした。



神戸学院大学「NPOマネジメント論」へ参加し、大学生との意見交換を行いました。

大学生へのアプローチ

神戸学院大学の授業に参加できたことも貴重な経験となりました。学生がそれぞれの出身県のNPOについて調べた結果の発表を行う様子を見学し、日本にどのようなNPOが存在するかを知ることができました。また学生との意見交換はとても興味深かったです。私はホニアラの現状について簡単に説明し、日本のようにNPOが多くないこと、それゆえに親戚や地域のつながりが強いこと、ごみ問題をはじめとしたソロモン諸島の社会や地域が直面する環境問題を解決するために、そのネットワークを活かした活動を行わなければならないこととお話しました。この活動を通じて、大学でNPOについて学生に教えることは、学生の社会的な責任感を育むことができ、次世代を担う人材を育てているということを知りました。これは、草の根事業の第2期事業の主要な活動の一つとなっている各環境学習センターでの活動（次世代を教育すること）に通じると感じました。

また、別の日には大学生の前でプロジェクトについて説明する機会があり、人前で話すことに自信を持つことができ、今後プロジェクトの職務を遂行するなかで活かせると思いました。



フィールドワークとしてNPOを学びに来た大学生にソロモンでのプロジェクトを説明しました。



まず、1日目はLEAFプロジェクトの第2期事業の枠組みについて学びました。その中で、これまでLEAFが関わりを持ってきた省庁や団体の担当者について知ることが出来ました。これは私自身がプロジェクトを推進していく中で、助けが必要な場合に、誰に連絡を取ればいいのかを理解するうえで非常に重要でした。またLEAF事務局の業務内容や会計業務を通じてLEAFの設立背景や他のセクター（民間企業、市民、市役所）を繋げる役割を果たしていることについて知ることができました。



LEAFの設立経緯や西宮市での多様な活動について長手事務局長が講義しました。



西宮市貝類館では、展示の見学や受付業務等についての研修を行いました。ソロモンには、貝に特化した博物館はありませんが、学生時代にソロモンの貝について研究していたこともあり、熱心に見学しました。



甲山自然環境センターでは、間伐材をチップにする木質チップカーの操作方法を学びました。

小学生の環境学習

環境学習を進める中で、理論的な学びだけではなく、施設における実践的・経験的な学びも重要であるということが理解できました。例えば、西宮市貝類館では200キロのシャコガイから小さな貝までが展示されています。この施設を訪れることは、児童・生徒だけでなく、その親も施設の展示を通じて、学ぶことができる手段です。また、研修期間中に2回、西宮市内の小学校の環境学習活動に参加することができ、とても楽しく、有意義な時間を過ごすことができました。野外での活動が、子どもたちに自然とのつながりや身の周りの自然を自分たちの責任として保護、保全していくための気づきのきっかけになっていると感じました。また小学生のうちからこのような教育を行うことで、彼らが成長し、様々な社会で生きていく際に、知識を持って、人間社会と自然のつながりを意識して行動することにつながるのではないかと思います。

また、北山植物園や甲山自然環境センターの見学を通じて、「早くソロモンに帰って、学生たちに自然と人のつながりについて学ぶ機会を作りたい」という強い気持ちが芽生え、またそれが評判になれば、私の愛する国を多くの観光客が訪れるきっかけにもなるのではないかと思います。



小学校の環境学習（地域の池の生きもの調査）の活動支援を見学しました。ホニアラ市でも同じような活動の実施を予定しています。



甲東エココミュニティ会議主催のごみ減量ワークショップに参加しました。地域の方もホニアラ市のごみ問題について興味を持っておられました。

地域・市民への環境啓発

フィールドや学習施設を活用して、市民をどのように教育し、巻き込むかということも、プロジェクトを進めていく中で重要なことだと思います。研修の中で、参加したイベント（西宮北口駅構内での生き物展示）では、日本語を話したり、理解したりすることはできませんでしたが、私ができる限りのお手伝いを行いました。このイベントでは、市民が水槽の生き物を見るだけでなく、人間と生き物とのつながりの重要性についても学ぶことができ、とても興味深く、私の視野を広げることにつながりました。また、このような活動をソロモンに帰ってからプロジェクトの活動の一つとして行いたいと思いました。

今回の研修で、プロジェクトで行うほとんどの活動や自分が行うべき業務について知ることができ、新しくプロジェクトで働く私のような者にとって、とても貴重な経験となりました。この研修に関わってくださったすべての方に感謝の意を表します。また、これからLEAFの職員として皆さんと一緒に働いていけることをとても楽しみにしています。ありがとうございました。



西宮北口駅構内で行われた生きもの展示の運営補助を行いました。小学校の環境学習支援活動で出会った小学生に話しかけられる場面もありました。